

周作クラブ会報

(第70号)

2018年2月20日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

新年会報告
 会報の記録
 「周作クラブと私」
 磯見辰典氏追悼遺稿
 42
 原典の旅案内
 連載 樹座三十年⑦
 13
 連載 遠藤先生との思い出
 20
 医療ボランティア報告
 23
 長崎文学館便り
 22
 周作クラブ長崎便り
 21
 特別寄稿
 22

周作クラブ「会報」70号を記念して

21世紀に遠藤文学を共有しませんか

加藤 宗哉

周作クラブ「会報」第一号は、2000年9月14日に発行されている。遠藤周作没後4年目のことだが、「愛読者の会」が作家の死後に誕生したというのは他に例がないだろう。

会の目的は、初めから明確であった。「会報」(第一号)1面に、たとえば遠藤順子夫人はこう言葉を寄せている。

「クラブを通じて遠藤が残してまいりました、人間の弱さに対する共感というイメージが二十一世紀にも受け継がれるように祈っております」

この頃、会員に加わった一人の女性から私も一通の手紙を受け取っているが、そこには、「クラブに集まる方達は何処かの本屋で私と同じ本を買って、読んで、何かしら心に感じた同志だと思おうと不思議で壮大な縁を感じます」とあった。

遠藤文学をどう読んだか——共有するこの体験を伝え合うことが、周作クラブの目的といえる。時には、愛読者による「遠藤周作文学賞」が出来ないものか、などと夢も語られたが、これらの動きを全国の会員に報告する「会報」(年4回発行)が、今年で18年、70号を迎えたということになる。ボランティアで行われる「会報」発行に

は、この間、多くの方々携わってきた。初代編集人は故・小松捷利さん、第6号から現在の高橋千劍破編集長にかわった。実務を取り仕切る副編集人も、第9号から56号まで金子コウさんが、以後は田村百合子さんが担っている。

その「会報」から、第30号(2008年2月)に掲載された巻頭エッセイ、遠藤龍之介さんによる「あの頃のこと」を紹介したい。遊びに盛んだった学生時代、父親が初めて「大人の世界」に誘ってくれた。自分が主宰していた素人劇団「樹座」へ来てみないか。そしてこう言った。

「若い時は何をしても面白い(略)ところがなあ、大人になるとちょっとした工夫をしなけりゃ物事は面白くならないのさ」。龍之介さんはこう書いている。「工夫して人生を楽しむ、その精神は、この周作クラブの中に脈々と受け継がれているような気がします。そしてそこから得るものは、きっと努力しなくても楽しい若き時代よりも、何倍も価値があるような気がしております」

「会報」全70号の掲載記事については4〜12ページにバックナンバー目次が載っています。

[特報] 遠藤周作とコスモス

角力灘に面した遠藤周作文学館。そのテラス下の傾斜地には、昨秋、コスモスが満開となりました。季節が少しずれませんが、あまりに見事だったので、カラーが使える今号でご紹介したいと思います。

もともとその場所は、石ころも目立つ荒れた土地でしたが、学芸員の北村沙緒里さんが町の人にコスモスの種をもらったことから、館長と二人で土を耕したそうです。北村さんは以前、長崎の大竹豊彦さん(元「とら寿司」の御主人)から、「遠藤先生はコスモスが好きだった」と聞き、テラス下の花越しに角力灘が眺められたら——と種を植えたのが2014年のことです。種はその年には花を咲かせましたが、2017年からは市の予算で花壇(170㎡)が造成され、現在では地元の子供たちも種を植えています。文学館から眺めるにはテラスの下を覗き込むようにしてください。また、館内の展示室の西向きの出窓からも毎年の秋、1000gの種による満開のコスモスが見られます。



遠藤周作文学館の傾斜地に昨秋満開!!

遠藤先生とコスモス

「なあ お前さん、ぼくが死んだら、時々墓参りに来てくれよな。コスモスの花束でも持って」

移動中の車の中だったか、休憩中の喫茶店だったか、先生がつぶやいた事がありました。遠くの緑か、雑踏かを眺めながら。「そんなの、ずっとずっと先の話です！」私は、まともに答えたらそんな日が直ぐに来てしまうような気がして、話を遮りました。あの時ふっと微笑んだ先生に、私は何と答えたらよかったですでしょうか。

これまで何回かお参りには伺ったものの、花束にするには頼りない気がしてコスモスはお持ちしたことがありません。外海の文学館の周りは、秋になると、美しいコスモスの花で覆われると聞きました。きっと、遠藤先生のコスモスだと思います。

「どうだ、ぼくが咲かせたぜ」そんな声が聞こえてきそうです。

清水優子(周作クラブ会員・元「キリスト教芸術センター」遠藤周作副会長・秘書)

記/編集部